スポーツマンシップの意義

加藤　英一

§1.　背景
§2.　問題意識
§3.　目的
§4.　先行研究
§5.　聖なる概念としてのスポーツマンシップ
§6.　結論

梗概

今日、スポーツは広く社会の隅々にまで浸透しており、誰もがスポーツを享受する権利を有している。しかしそれに伴って、スポーツをめぐる様々な問題も生じている。例えば、暴力事件や賭博、八百長、ドーピング、性別や人種等による差別、商業偏重主義、スポーツの政治利用、等々を挙げることができる。そしてこれらスポーツをめぐる問題が生じるたびに、人びとから語られるのがスポーツマンシップという言葉である。

スポーツマンシップは時代によって、その在り方も変化している。本稿ではその歴史的変遷を倫理社会学的に捉え、現代の社会におけるスポーツマンシップの意義を考察した。

スポーツマンシップという概念は社会と密接に関連しており、社会の変動と共に変遷してきた。しかしその一方で、スポーツを通じて聖と俗とを分ける差異化のための、コードとして機能している点においては歴史を通じて共通している。

キーワード：スポーツマンシップ、商業主義、聖と俗

1．背景

スポーツの大衆化が叫ばれて久しい。多くの人びとが今日、様々なスポーツに親しんでいる。また現代の社会において、スポーツは個人の単なる遊びには留まらない。ある人にとっては健康のため、またある人にとってはストレスの解消のため、またある人にとってはスポーツそのものが生活の糧となっていることもある。スポーツは社会に溶け込み、現代社会とは分かちがたい存在となっている。

このように現代社会に深く根ざしたスポーツであるが、その起源は古代ギリシャにまで遡ることができる。しかし今日、我々がスポーツとして営んでいるものは、19世紀の英国から生じた近代スポーツを示している。それではこの古代ギリシャにおけるスポーツと近代スポーツとでは、その相異をどこに求めることができるのであろうか。

この疑問に答えるためには、両者の特徴の違いに注目すべきである。非常に単純に

それを言い表すならば、前者には競技と暴力との境目が不明瞭、又は存在しないのに対して、後者は激しい競技において暴力的側面を可能な限り排除している点にある[1)]。近代スポーツは、その成立過程において競技の組織化、即ちルールというものを導入することでこの点を可能にしたのである。

また組織化された近代スポーツには、暴力の排除だけではなく、平等性や公平性という概念もスポーツの中に埋め込まれた。それらは１種の倫理観であり、スポーツにおいてはスポーツマンシップやフェアプレーがそれを示している。

２．問題意識

近代スポーツが社会の隅々にまで広がると共に、そこには新たに様々な問題も生じるようになった。例えば、暴力事件をはじめ、賭博、八百長、ドーピング、性別や人種による差別、スポーツの政治利用、そして商業偏重主義や悪しき勝利至上主義、等々挙げればきりがない。

そしてこれらが社会問題として人びとに認識されるたびに話題に上るのが、スポーツマンシップやフェアプレーといった、近代スポーツにおける倫理観である。今日のスポーツにおいて、スポーツマンシップの新たな意義が求められている。

３．目的

このように今日、スポーツマンシップの再考が求められている。これを換言すれば、スポーツマンシップの現代的意義が問われているということである。本稿は、このスポーツマンシップにおける、現代的意義について考察することを目的としている。

特にこの目的のために、社会学における機能主義の視点を利用したい。即ち、現代社会のスポーツにおけるスポーツマンシップが担っている、機能とは何かを考察することである。但しスポーツマンシップは、スポーツ倫理において研究されてきた経緯からも社会学理論だけではなく、倫理学的視点からも考慮すべきである。そこで本稿は、この両学問を跨いだ倫理社会学的側面からこの目的に迫りたい。

４．先行研究

４－１．スポーツマンシップの概念研究

梅垣と友添は、英国における“sportsmanship”と日本における「スポーツマンシップ」との意味の相異について指摘している（梅垣・友添 2002）。ここでは前者が単に「スポーツマンであること」と解されており、それはスポーツマンとしての身分、技量、そして手技を示すのに対して、後者はスポーツの場面でのスポーツマンを規制する倫理的な行為規範を内包しているとされる。特に日本では、ここから集団本位性や没我、個人の犠牲を強調する「スポーツマンシップ」が醸造された。２者間の相異は、“sportsmanship”がキリスト教信仰に基づき神に愛される、自律した個人がお互いの権利を尊重しながら、神を媒体として集団を形成するのに対して、「スポーツマンシップ」は日本的集団主義によって個人が集団に埋没してしまっていると指摘

されている。このことから“sportsmanship”は、キリスト教の影響を考慮したうえで解釈すべきと結論している。

川谷はスポーツのルールを、構成的ルールと派生的ルールとに分け、前者は違反すると競技が競技として成立しなくなるルール、そして後者は違反しても競技としては成立するものの違反すると道義的な点から競技者が批判されるルールと捉える（川谷 2005）。その上でスポーツマンシップに関しては、後者における姿勢が問われることになる。競技における勝利の追求を、この派生的ルールよりも重視する場合、派生的ルールを逸脱してもそれはスポーツマンシップには反していないといえる。しかしそれに対して、派生的ルールを競技における勝利の追求よりも重視する場合、派生的ルールを逸脱することはスポーツマンシップに反することになるといえる。ここで川谷は前者の立場をとっている。

林はスポーツマンシップを、競い合う中で立場の違う者を尊重する“respect”の精神であり、その精神のもと行動していく「勇気」と「誠実さ」であると捉える（林 2015）。この立場の異なる者を理解するという視点から、スポーツマンシップは「共生社会」を創造していくための概念となるとの主張がされている。

釜谷と渡邊は、スポーツマンシップを騎士道精神をバックグラウンドにしながら19世紀中頃に誕生した、倫理的な規範が今日につながったものと捉えている（釜谷・渡邊 2020）。日本ではこれがF. W. ストレンジ（Frederick William Strange）を通して、武田千代三郎によって広められた。その際、武田はスポーツマンシップを、日本の武士道と関連付けながら「競技道」と名付けた。このような経緯で輸入されたスポーツマンシップという概念ではあるが、そこには国や時代を超えた共通項が見いだされる。

４－２．スポーツマンシップの歴史的研究

岸野は古代ギリシャの「競技者精神」について、神の末すえの上級の武将の好戦的な気質を競技の場面に反映したものと説明したうえで、日本に影響を与えたスポーツマンシップはそれとは異なり、中世キリスト教を背景とした騎士道精神を受け継いだ英国のパブリックスクールから生まれたものであると説明をする（伊藤・岸野・川村・木下 1967）。但し、近代日本で説かれる、スポーツマンシップも武士道もその本来の姿を正しく伝えていないことが木下によって指摘されてもいる（伊藤・岸野・川村・木下 1967）。

阿部はスポーツマンシップの構成要素をフェアプレー、敢闘精神、名誉の精神、団体精神、アマチュアリズム、等々と捉えている（阿部 2001）。しかしこうした要素は、近代以前の騎士道精神や民衆の日常的生活倫理としての、自然法的正義感と近代のナショナリズムとリベラリズムという性格の異なる精神的基盤に由来している。このことから人格形成としてのスポーツというイデオロギーが、今日では機能不全となっている。それはとりもなおさず、スポーツマンシップという言葉のイデオロギー的機能が喪失したことを意味するものである。

中江の研究ではスポーツマンシップの起

源が明らかにされている（中江 2006）。近代英国で発明されたとされる、スポーツ及びスポーツマンシップの文化的源流は、中世のスポーツ、馬上試合の中で醸成されたものである。この馬上試合における、騎士道的倫理がその後スポーツマンシップへと繋がっていったのである。このようにスポーツマンシップは、特定の文化的背景を担っていることから、普遍的理念とは言い難いといえる。

阿部によって著された『近代スポーツマンシップの誕生と成長』は、スポーツマンシップに関して、その誕生及び歴史的経緯に関する体系的な研究書である（阿部 2009）。この中でスポーツマンシップという言葉がそれまでの「狩猟的」概念から、倫理的ニュアンスを含んだ意味に変化してきたのが、19 世紀末から 20 世紀初頭であるとされている。この点は近代スポーツの誕生と軌を一にしている。ここでは特に英国のパブリックスクールにおける、教育としてのスポーツの導入が大きく影響を及ぼしている。またそこにおいて「筋肉的キリスト教」としての C. キングズリ（Charles Kingsley）と T. ヒューズ（Thomas Hughes）の影響も無視することはできない。

英国のパブリックスクールの中でもラグビー校は、T. アーノルド（Thomas Arnold）による改革が行われた。プリーフェクト・ファギング制度はその特徴の一つとしてあげることができる[2)]。英国のパブリックスクールは、このような制度の下で教育としてのスポーツを成熟させ、近代スポーツの誕生に貢献すると共に倫理的ニュアンスを含んだスポーツマンシップを誕生させることになったのである。

石井は 19 世紀の新聞・雑誌からスポーツマンシップの語の使用頻度と意味内容を分析した（石井 2013）。その結果、この言葉は 1870 年代半ば頃から競技スポーツに関して使用されてきたものの、80 年代半ばまで依然として狩猟や銃猟に関するものが大多数であり、その意味はなお多様であった。倫理的ニュアンスがみられるようになるのは、1880 年代半ばからであるが、その際にそれは、スポーツマンシップの「欠如」を判断する文脈でみられた。特に欠如を指摘されたのは、大部分が労働者階級や外国人・植民地人であった。

４－３．スポーツマンシップと教育に関する研究

日本におけるスポーツマンシップと教育に関する実証的研究には、石井らによる一連の研究がある（石井・賀川・岡沢 1977、岡沢・石井・賀川・米川 1978、石井・賀川・米川・岡沢 1978）。スポーツマンシップに対する態度の研究がそれである。ここでは大学生を被調査者として、スポーツマンシップの教育を受ける前と受けた後、またそれを受けた集団と受けない集団との比較、体育系の学生と一般の学生との比較、競技水準別の比較、等を統計的に分析している。

スポーツマンシップという概念は、これまでも指摘されてきたように、当該社会の制度や文化と密接な関係にある。しかし先行研究では、スポーツマンシップの変遷と社会の変動との関係についての考察が十分であるとは言い難い。そこで本稿ではこの

点に絞って、概念としてのスポーツマンシップと社会との関係を、倫理学における徳と社会学における社会的機能という２つの視点から捉えてみたい。

５．聖なる概念としてのスポーツマンシップ

５－１．徳としてのスポーツマンシップ

まずは今日使用されている、スポーツマンシップという言葉からみていくことにする。漠然に「正々堂々と公明に勝負を争う競技者の精神」と言えば、その意味から大きく外れることはないだろう。しかし更に詳しくみていくと、ウエッブ版ウェブスター辞典によれば“conduct（such as fairness, respect for one's opponent, and graciousness in winning or losing）becoming to one participating in a sport”と記されている。それに対してフェアプレーは、“equitable or impartialment : justice”となっている。フェアプレーが「公平性」を表現しているのに対して、スポーツマンシップは「スポーツに参加する行為の姿勢」を表現している。特にここでは「公平性」だけではなく、「競技相手に対する敬意」や「競技における勝敗に関わらず毅然とした態度」も含まれている。

フェアプレーが試合や競技における、状況の正当性を示しているのに対して、スポーツマンシップは、スポーツを行う人間の特性を示していると言える。謂わば、スポーツマンシップという言葉は、スポーツを行う人の徳を意味しているのである。そこでこの点を軸として、歴史的経緯からこのスポーツマンシップの意義を探っていくことにする。

５－２．古代ギリシャのオリンピア祭

スポーツの起源は、スポーツの定義の多様性によって様々な説があるが、古代ギリシャに求めることが多い。その論拠としては、古代ギリシャにおける都市国家間のオリンピア祭の開催が挙げられる。オリンピア祭はB.C.776年から開催された、ギリシャ神話における全知全能の神、ゼウスを祭る競技会である。そこで主となる競技として、スタディオンにおける競走を挙げることができる。人々は一斉にゼウス像に向かって走り、一番先にたどり着いた者が勝者として神に最も近い者とみなされた（田原淳子 2010pp.27-28、玉木正之 1999pp.49）。

古代オリンピックでは、スポーツが神への接近という、聖なる活動のひとつと見做されていたのである。但し、この祭りに参加できるのは、男性市民に限られていた。女性や子供、奴隷は排除されていたのである。オリンピア祭は聖と俗、即ち聖なる男性市民と俗なるその他の人びととを分かつ、機能を果たしていたのである。

すると古代ギリシャ時代にはまだ存在していなかった、スポーツマンシップという語彙を敢えて当時の文脈に即して解釈すると、それは特定の人間が有する、ひとつの徳として理解することができる[3)]。プラトンは知恵、勇気、節制、正義という４つの徳を示したが、スポーツマンシップはまさにこの４つの徳の内の、貴族が有する知恵と軍人が有する勇気を意味するものと捉えることができる[4)]。これらを備えた者こそ

が、神に最も近い聖なる存在となるのである。ここでは徳としてのスポーツマンシップという概念が、聖に属する人びとと俗に属する人びととを分けるコードとして機能しているのである。

５－３．近代スポーツとスポーツマンシップ

その後、キリスト教が大きな影響力を持った長い中世という時を超えて、近代という新たな時代が幕を開けることになった。そして19世紀末から20世紀初頭にスポーツマンシップという語彙が生まれた。特にここでは英国が多大な貢献を果たすことになった。

英国は他のヨーロッパ諸国と比べてより早く産業革命を迎えた。経済の発展は新たな階級としてのブルジョアジーを生み出したが、スポーツの近代化を初めに担うことになったのが彼らであった。それまで暴力的な側面を含んでいたスポーツを、ルールを通じて組織化することで近代スポーツの基盤を創り上げていったのである。

またこの過程で生み出されたのが、アマチュアリズムである。経済の発展は資本家としてのブルジョアジー階級を生み出すと共に、大量の労働者階級を生み出す結果となった。近代スポーツを組織化していったブルジョアジーであったが、労働を通じて肉体的に優位となった、労働者がブルジョアジーを競技において脅かすようになったのである。そこでブルジョアジーはスポーツ参加への条件として、「競技おいて金品を得ることがない者」としてのアマチュアの規定を設けることとなったのである[5)]。このことによって労働者階級は、スポーツから排除されることになった。スポーツはブルジョアジーによる、神聖で高貴な活動とされたのである。

このように英国は経済面でもスポーツの面でも、他のヨーロッパ諸国に先んずることになったわけであるが、国家政策として帝国主義化を進めるにあたり、優秀なリーダーとしてのエリートの養成が不可避となった。その役割を担ったのが、パブリックスクールである。パブリックスクールは、裕福なブルジョアジー階級の教育機関として、英国ジェントルマンを輩出する養成所となった。そして近代スポーツも、このパブリックスクールから発展していった。

当初、キリスト教はスポーツを軽視する姿勢をとっていた。特に中世のキリスト教では、精神と肉体とを分ける心身二元論が普及しており、肉体を精神と比較して低いものと捉えていた。しかしパブリックスクールの校長で敬虔なクリスチャンでもある、T.アーノルド（Thomas Arnold）によって、この考えに変革がもたらされた。それが「筋肉的キリスト教（muscular Christianity）」の思想である。これは「自らの肉体を神から与えられた道具と捉え、神の意思を実現するためには、その道具である肉体を徹底的に鍛え上げること」（宮島 2017pp.181）が求められるとした、教育イデオロギーである。

その後、C.キングズリ（Charles Kingsley）やT.ヒューズ（Thomas Huges）の影響もあり、パブリックスクールは教育の中にスポーツを取り込み、クリスチャン・ジェントルマンを英国を担う人物として輩出することになった。そしてクリスチャン・ジ

ェントルマンとしての競技者に求められた徳がスポーツマンシップである。これが先述の「スポーツに参加する行為の姿勢」であり、「公平性」、「競技相手に対する敬意」や「競技における勝敗に関わらず毅然とした態度」へと繋がるのである。

英国で誕生した近代スポーツは、その過程においてアマチュアリズムを生み出し、聖なるスポーツを確立した。そしてそのスポーツを担うブルジョアジーの子弟を、パブリックスクールにおいて養成した。そこでは「筋肉的キリスト教」の影響もあり、クリスチャン・ジェントルマンが英国のエリートとして輩出されることになった。その精神的バックボーンとなったのが、徳としてのスポーツマンシップである。

古代ギリシャでは、４つの徳を有した男性市民をもって神に近い存在と捉えた。そこでは徳としてのスポーツマンシップが、聖と俗とを分ける差異化のためのコードとして機能したことは前述のとおりである。それと比べて近代スポーツでは、アマチュアリズムによってスポーツを聖なるものとし、それへのアクセス権をパブリックスクールというブルジョアジーの教育機関に担わせた。パブリックスクールでは、クリスチャン・ジェントルマンの養成が行われたが、この中で徳としてのスポーツマンシップが醸成されることになったのである。これによってスポーツマンシップという徳を有した、聖なるブルジョアジー階級とそれを持たない俗なる労働者階級とが分けられることになったのである。ここでもスポーツマンシップは、聖と俗とを分ける差異化のためのコードとして機能することになった。

但し、古代ギリシャのスポーツマンシップと近代のそれとは、聖と俗の差異化を明示化する機能という点では同一であるものの、差異化の背景が異なっている。前者では男性市民という生得的地位がその前提になっているのに対して、後者は経済活動による貧富の差という獲得的地位がその前提となっている。

５－４．商業主義とスポーツマンシップ

現代社会においては、人びとにとってスポーツは欠くことができない生活の一部となっている。スポーツは一部の階級の独占物ではなく、人種や年齢、性別、国籍、等々に関係なく全ての人びとがそれにアクセスし楽しむことができることになっている。スポーツの大衆化である。その背景には、

テクノロジーの発達や経済･産業の発達、そして民主主義の普及などが存在している。

テクノロジーの発達は産業構造の変化を通じて、肉体労働から多くの人びとを開放した。生産性の向上は労働時間の短縮をもたらし、人びとに余暇の時間を拡大させた。経済の発達は、人びとに物質的な豊かさをもたらすと共に非物質的なものに対する価値を高めた。豊かさは人びとの寿命を伸長させると共に健康への関心を高めた。そして民主主義は、人びとに平等の意識を広めることになった。これら一連の社会変動は、前述のスポーツの普及に大きな影響を与えたことは明白である。

また経済の発達は、スポーツそのものの在り方にも変化をもたらすことになった。スポーツの商業化である。スポーツの商業

化は、スペクテイタースポーツの普及やスポーツの巨大化、スポーツのグローバル化、スポーツビジネスの拡大等を齎した。その意味では、スポーツの更なる普及に貢献したと言える。

しかしその一方でスポーツの商業化によって、スポーツそのものが経済原理に染まっていくことにもなった。そこでは何よりも金銭的な利益が優先される。スポーツの商品化である（井上・菊編 2020 pp.28）。

アマチュアリズムをその理念の一つとして掲げてきた、オリンピックにおける変化はそのひとつの例として挙げることができる。1974 年の IOC 総会においてオリンピック憲章からアマチュア規定が削除された。アマチュアの世界にプロのスポーツの競技者が参加することになったのである。プロスポーツとアマチュアスポーツとの垣根が無くなると共に、そこではプロフェショナルリズムによるアマチュアリズムの浸食が進行することになった。

また 1984 年のロサンゼルスオリンピックでは放送権料、スポンサー協賛金、入場料、関連グッズ販売によってその費用が賄われたことは有名である（井上・菊編 2020 pp.32-33）。中でも放送権料は、開催経費の 45％近くを賄うことになった。その上、スポンサー協賛金に関しては、一業種一社に限って公式スポンサーを募り、それらのスポンサーだけに公式マークやロゴの使用を許可して PR 上の独占権を与える方式をとった。その結果、協賛金は 1 億 3,000 万ドルに達することになった。

このようなスポーツの商業化は、オリンピックにとどまることはなく、スポーツ界全体に広まることになる[6]。そして経済原理がスポーツ活動の基盤となると、それは商業偏重主義、敢えて言えばスポーツが悪しき商業化へと陥ることにもなった。これは競技における勝利至上主義をもたらすと共に賭博や八百長、ドーピングへと繋がる危険性を孕んでいる。

商業化されたスポーツは、金銭を目的とした世俗性、即ち俗としてのというイメージを生むことになった。しかしそれに対して、一方でスポーツ本来の価値を追求したいという欲求から、商業主義に染まっていない聖なるスポーツも求められることになった。ここで聖と俗とを分けるコードとして機能することになるのが、スポーツマンシップである。

現代のスポーツマンシップという概念は、極端に商業化され世俗化されたスポーツからスポーツ本来の価値を守るために、聖と俗を分ける差異化のためのコードとして機能している。古代ギリシャではオリンピア祭を通して、神に近い存在としての男性市民とその他の人びとを聖と俗とに分けた。近代英国では階級格差によって、聖と俗とを分けた。前者は生得的地位を基盤としたのに対して、後者は獲得的地位を基盤にした。これに対し現代において、極度に商業化された俗なるスポーツが現れることで、聖なるスポーツの領域がここにおいて創り出されることになったと言える。この聖なるスポーツにおいて、競技する者には徳としてのスポーツマンシップが宿っている、換言すれば商業化に毒されていない徳を有する者がフェアプレーを行っているのが、真のスポーツマンとされるのである[7]。

ここにおいてスポーツマンシップは、E.デュルケム（Émile Durkheim）の言う集合的実在を表明する、集合表象としての儀礼とみなすことができよう[8]（Durkheim1912（= 1975）pp.31）

6．結論

スポーツマンシップという言葉は、近代英国において生まれた。しかしこの概念そのものは、古代ギリシャ時代のオリンピア祭にまで遡ることができる。ここではスポーツが神聖性と深い関りを持っている。また競技に参加できるのは、男性市民に限られていた。そこでオリンピア祭は聖と俗、即ち聖なる男性市民と俗なるその他の人びととを分かつ、機能を果たしていたのである。スポーツマンシップとみなされる概念は、聖なる男性市民が有する徳と捉えることができる。

英国において近代スポーツが形成される過程において生まれたのが、スポーツマンシップであるが、それは聖なるブルジョアジー階級とそれを持たない俗なる労働者階級とを分ける機能を果たした。階級による聖俗の差異化である。スポーツマンシップは、クリスチャン・ジェントルマンとしての徳とみなされることになった。

古代ギリシャのスポーツマンシップと近代のそれとは、聖と俗の差異化を担う機能を果たしているという点では同一である。しかしそこでの差異化の背景は異なっている。前者は生得的地位、後者は獲得的地位がその背景となっている。

それに対して現代社会では、高度に商業化された俗なるスポーツが拡大したことで、聖なるスポーツの領域が人々から求められているのである。ここでは、スポーツの世俗化（商業主義、勝利至上主義）と神聖世界としてのスポーツとを差異化させるコードとしてのスポーツマンシップが機能している。商業化に毒されていないスポーツマンシップという徳を有する者こそが、真のスポーツマンであり、スポーツはこの真なるスポーツマンによって担われることによって、俗性が排除され神聖なものとなるのである。スポーツマンシップは、集合表象としての儀礼となっていると言える。

スポーツマンシップは、歴史を通じて聖と俗とを分ける差異化のためのコードとして機能してきた。しかしその背景には時代の変化、即ち社会変動と深い関りを持ったものであることも理解することができる。

補注

1）近代以前の粗暴なスポーツから、ルール等の組織化を通して、暴力を排除したのが近代スポーツであるとする見解は、エリアス（Norbert Elias）に求めることができる（Elias,N. & Dunning,E. 1986（=2010））。但し、暴力そのものも文化相対的な側面を有しており、「古代のスポーツが、高度に文明化した現代では想像もできないほど「暴力への寛大さ」に支えれれていたからといって、そのようなスポーツ文化を単純に「野蛮」と決めつけることはできない」（根上 2020pp.167）とも言える。

2）この制度によって、上級生と下級生といった学生間の自主独立の精神が促進され、自ら考え行動すると共に互いに他者をサポートする精神、例えばラグビーでいうことろの“one for all, all for one”といった精神へと繋がり、

これがエリートとしての英国ジェントルマンの教育の特徴のひとつとなったといえよう。

3）オリンピア祭においても、神を前にして不正な行為は戒められていた。

4）競技理想は古代ギリシャ人における貴族の徳であるとされる（高橋 2020pp.7）

5）英国における近代スポーツの成立過程に関しては阿部（阿部 2009）に詳しい。また資本主義社会を担うブルジョアジーが、スポーツを自らが独占すると共にアマチュアリズムによって、そこから市場化・商業化を排除すること自体に矛盾が生じている点に関しては内海が指摘している（内海 2020pp.30-31）

6）他にもサッカーのワールドカップなどを挙げることができる。

7）具体的には、「勝利にのみ固執せずに競技相手を共にスポーツという文化を創出する協力者と捉える精神を持つ者」、「競技相手を人として尊重する、即ち他者を（勝利を得るための）手段としてではなく、目的として捉えるといったカント主義的考えを持つ者」といえよう。

8）「儀礼とは集合した集団だけの中で生まれて、これらの集団のある心的状況を刺激し維持しもしくは更新するはずの行動の様式である」（Durkheim1912（＝ 1975）pp.31）

引用参考文献

阿部生雄，2001,「近代スポーツマンシップとその歴史的性格」『日本体育学会大会号』52(0)：78.

阿部生雄，2009,『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会.

林直樹，2015,「スポーツと共生－スポーツマンシップの観点から－」『共生科学』6：81-86.

Coakely,J. & Donnelly,P.,2009,*Sports in Society: Issues and Controversies*, McGraw-Hill Ryerson Limited.（＝2013，前田和司・大沼義彦・村松和則共訳『増補　現代スポーツの社会学－課題と共生への道のり－』南窓社.）

Durkheim,E.,1912, *Les Formes élémentaires de La Vie religieuse, Le Systéme totémique en Australie*. Paris.（＝1975,古野清人訳『宗教生活の原初形態』岩波書店.）

Elias,N. & Dunning,E.,1986,*Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*, Oxford : Basil Blackwell.（＝ 2010, 大平章訳『スポーツと文明化－興奮の探求－』法政大学出版局.）

井上俊・菊幸一編，2020,『改訂版 よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房.

石井源信・賀川昌明・岡沢祥訓，191,「スポーツマンシップに対する態度の研究－イメージの変遷と説得コミュニケーションによる効果－」『日本体育学学会号』28(0)：191.

石井源信・賀川昌明・米川直樹・岡沢祥訓，1978,「スポーツマンシップに対する態度の研究＜その３＞」『日本体育学学会号』29(0)：174.

石井昌幸，2013,「19 世紀意義率における「スポーツマンシップ」の語義－ 1800 年から 1892 年までを中心として－」『スポーツマン社会学研究』21(2)：31-50.

伊東明・岸野雄三・川村英男・木下秀明，1967,「比較体育史研究上の問題点－スポーツマ

ンシップー」『体育学研究』11(5)：291-293.
川谷茂樹，2005,『スポーツ倫理学講義』ナカニシヤ出版.
宮島健次，2017,「第13章第3節 アーノルドとアスレティシズム」友添秀則編『よくわかる スポーツ倫理学』ミネルヴァ書房.
中江桂子, 2006,「スポーツマンシップの起源」『スポーツ社会学研究』14：47-120.
岡沢祥訓・石井源信・賀川昌明・米川直樹，1978,「スポーツマンシップに対する態度の研究（その２）」『日本体育学学会号』29(0)：171.
高橋幸一，2020,「第１章第１節 近代以前のスポーツ」井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論 改訂版』ミネルヴァ書房.
田原淳子，2010,「第２章オリンピックの意義って何だろう」高峰修編『スポーツ教養入門』岩波ジュニア新書.
玉木正之，1999,『スポーツとは何か』講談社現代新書.
内海和雄，2020,「第３章第２節 アマチュアリズムの解体」『よくわかる スポーツ文化論』ミネルヴァ書房.
梅垣明美・友添秀則，2002,「Sportsmanship の解釈に関する研究－チーム・スピリットとキリスト教の関連に着目して－」『体育・スポーツ哲学研究』24(1)：13-23.
谷釜尋徳・渡邊瑛人 ,「スポーツマンシップとは何か？」『スポーツ健康科学紀要』17：5-11.